

『栄花物語』絵入版本について

——抄出本文から考察する——

中 村 康 夫

要 旨 絵入九巻抄出本は、①政変（安和の変・花山院出家事件・伊周左遷等）、②仏教関係（出家全般・法華講等）③行事（算賀・歌合・行幸啓・祭等）を主要な本文抄出の主力針としている。

そして、前半は政変関連の記事が多く、半ばは仏教関係の記事が多くなり、後半は行事中心の抄出となっている。全体を通して、背景となった時代を紹介しようとする姿勢と、全巻に渡る本文の抄出、さらに全体にバランスよく挿絵を充実させようとする観点がある。

その編集方針には、安定の中に内在する不安定、平和の中に兆す混乱の芽など、ある種の歴史的に普遍的なテーマを見据えた知識人の目を感じられる。

はじめに

『栄花物語』は古活字本、明暦二年刊本と版行が進み、さらに絵入九冊本が出されて、江戸初期には本文はかなり流布したと見てよい。

しかしながら、古活字本も、明暦二年版本も、残念ながら作品の本文としては欠陥が多いものであり、絵入九冊本が本文を抄出する形にして読みやすく理解しやすくしたことで、読者層を確保し直したという面が大きかったように思われる。

そこで、本小稿では、絵入九冊本の『栄花物語』について、抄出された本文および挿絵に考察を加えて、内容及び成立事情等について、若干の見解を示しておきたいと思うのである。

原本

さて、ここに考察に採用する原本は架蔵の一本である。『栄花物語』絵入九巻抄出本は今日も古書肆に売りによく出ているので多数残存しているように見受けられるが、手元の一本は、刷りは悪くないもののごく僅かながら版木の磨耗による文字の欠損ではないかと思われるところも認められるので、版行された中でも江戸中期以降のかなり後に刷られたものに入るのはないかと思われる。

簡単に書誌を示しておくと、縦五五・六センチ、横一八・八センチ。表紙は布目浅縹。目録・系図一冊、本文八冊、

全九冊。題僉は中央上に「栄花物語目録（并）系圖」「栄花物語一（一八）」（冊数の下に所収の巻名を並記）。刊記・版元等の記事はない。落丁は二丁認められ、乱丁は三箇所あったが、乱丁は本文調査の前処理として正して綴じ直した。

『栄花物語』の本文研究は、松村博司氏によって精力的に進められた。その成果は三冊の『栄花物語の研究』^{（注1）}及び、朝日古典全書、岩波の日本古典文学大系、角川の全注釈等の注釈書によって広く利用されるところとなった。

松村氏によれば、絵入九巻抄出本は流布本系第三種に分類され、本文は古本系第二種本と流布系統本とが混在している、という。少なくとも、江戸初期に展開された古活字本から明暦二年刊本への版行の展開時にあった少なくとも誤りを持つ本文に比べると、抄出本文とはいえ、比較的良好な本文と認められることは間違いない。

小論では、本文の系統を論ずることが眼目ではないので、その実態に付いては別稿に譲ることとし、早速、本文の抄出について見ておきたい。

なお、資料の掲出については、絵入九巻抄出本ではどこを抄出したかを見ると同時に、どこを抄出なかったかを見ることも重要であるので、『栄花物語』の記事見出しについては本稿末尾にすべてをまとめて掲げ、記事見出しの右側に矢印を付して抄出された部分を示した。ただし、小見出しについては、松村氏の『全注釈』における掲示をそのまま利用した。

内容の検討

さて、本稿末尾にまとめて掲げた表を見ながら抄出記事の特徴について考えてみる。

抄出されている記事を大把みに捉えて記事の内容ごとに整理してみると、採られている記事は次のようになる。なお、巻順、記事順である。

- ・村上天皇とその時代
- ・月の宴
- ・安和の変
- ・永平親王譚
- ・花山天皇出家
- ・花山院出家後1
- ・花山院出家後2
- ・花山院出家後3
- ・詮子出家
- ・伊周に政権行かず
- ・伊周事件を起こす
- ・伊周配流・召還譚
- ・彰子入内
- ・相撲
- ・詮子の仏教活動と四十賀
- ・賀茂祭

- ・法華三十講・競馬・鷄合
- ・花山院崩御
- ・敦成誕生
- ・伊周の遺言・薨去
- ・伊周女その後・一條天皇時代の終わり
- ・一條天皇崩御
- ・三條天皇と妍子・城子
- ・顯信出家
- ・密通事件
- ・禎子誕生
- ・密通事件
- ・小一條院の東宮退位
- ・妍子と、賀茂行幸
- ・堀河女御の悲嘆
- ・和歌 1
- ・和歌 2
- ・道長の仏教生活
- ・妍子の仏教生活

- ・ 春日行幸
- ・ 法成寺のこと
- ・ 尼と和歌
- ・ 田植
- ・ 御八講
- ・ 歌会
- ・ 御祓
- ・ 彰子六十賀
- ・ 脩子落飾
- ・ 舍利会
- ・ 法華三十講
- ・ 高陽院の駒競・行幸啓
- ・ 大饗
- ・ 関寺の牛仏
- ・ 嬉子葬送
- ・ 小式部内侍産後逝去
- ・ 公任出家
- ・ 彰子出家

- ・火事
- ・顯信譚
- ・道長病惱
- ・住吉御幸
- ・天王寺參詣
- ・高陽院水閣歌合
- ・内裏根合
- ・頼通、宇治に籠もる
- ・天王寺御幸
- ・布引の瀧遊覧
- ・春日祭

以上のように六三項目に整理し直して、さらに記事を総合的な観点から更に絞りなおしてみると、絵入九卷抄出本は次の三項目を主な眼目として本文を抄出しているといえることができる。

- A. 政変 安和の変・花山院出家事件・伊周左遷等
- B. 仏教関係 出家全般・法華講等
- C. 行事 算賀・歌合・行幸啓・祭等

上記六三の各項目について、このA・B・Cの分類を実行してみると、以下ようになる。なお、判断を保留したものには*を付けた。

『栄花物語』絵入版本について

* 村上天皇とその時代

C 月の宴

A 安和の変

A 永平親王譚

A B 花山天皇出家

A B 花山院出家後 1

A B 花山院出家後 2

A B 花山院出家後 3

B 詮子出家

A 伊周に政権行かず

A 伊周事件を起こす

A 伊周配流・召還譚

* 彰子入内

C 相撲

B C 詮子の仏教活動と四十賀

C 賀茂祭

B C 法華三十講・競馬・鶏合

A B 花山院崩御

*敦成誕生

A 伊周の遺言・薨去

A 伊周女その後・一條天皇時代の終わり

A 一條天皇崩御

A 三條天皇と妍子・城子

B 顯信出家

A 密通事件

*禎子誕生

A 密通事件

A 小一條院の東宮退位

C 妍子と、賀茂行幸

A 堀河女御の悲嘆

C 和歌 1

C 和歌 2

B 道長の仏教生活

B 妍子の仏教生活

C 春日行幸

B 法成寺のこと

【栄花物語】絵入版本について

B 尼と和歌

C 田植

B 御八講

C 歌会

C 御祓

C 彰子六十賀

B 脩子落飾

B 舍利会

B 法華三十講

C 高陽院の駒競・行幸啓

C 大饗

B 関寺の牛仏

B 嬉子葬送

B 小式部内侍産後逝去

B 公任出家

B 彰子出家

A 火事

B 顕信譚

B 道長病悩

C 住吉御幸

C 天王寺参詣

C 高陽院水閣歌合

C 内裏根合

B 頼通、宇治に籠もる

C 天王寺御幸

C 布引の瀧遊覧

C 春日祭

以上、一概に断じきれないものも若干あるが、この整理によって見えてくることは、初め、Aの政変に関わる記事が多く、次第にBの仏教生活に関わるものを中心に、後ろのほうはCの行事関連の記事が大半になる。『栄花物語』の記事全体がそういう並びになっていると言えなくもないのであるが、挿絵の絵柄として参考にできるものが行事関係に多く、全体として絵入の版本としての完成度を考慮する中から、すべての巻にわたって記事を抽出しようとしたという要因も手伝っている可能性は考えられるであろう。

さて、六三項目のうち、*を付して判断を保留したものについて考察する。

まず、〈村上天皇とその時代〉は政権の安定をいうものであり、政変とは対極のものである。これは、明らかに平安時代という時代に対する理解の前提として用意されたものであり、「聖帝」などという言葉が繰り返されるのも象徴的な意味を持っている。その前提となるような安定した時代にあって実際は何があったかを示すこと、それが以下

の記事抽出のテーマであると考えられるのであり、むしろ、政変記事とセットで、政変を裏打ちするようにこの安定記事を用意することで、抄出本文の文学作品としての意味が鮮明になるということなのである。

〈彰子入内〉も政変とは直ちには関わりがないように見えるが、話は、伊周左遷とともに斜陽に喘ぐ中関白家を、後宮に入り御子を儲けることで支えた一条天皇中宮定子との対極を形成する話であり、少し後の〈敦成誕生〉の記事とともに、一見安定と繁栄を誇る記事のように見えながら、実際の力関係としては対立の構造を生み出すものである。

この後宮における対立構造は、三條天皇の後宮にあっても妍子と城子という形であり続けるわけであり、*を付けた〈禎子誕生〉の記事も、おめでたい話ではありながら、対立の構造を一方的でなく書き続けるという方針の中に息づいているといえるのである。

まとめ

これら三項目を抽出してみて、改めて『栄花物語』本文全体に目を戻してみると、安和の変関連記事の抽出が十分でないなど、これら三項目について執拗に記事を抄出しえているかといえ、なかなかそううまくはいっていない。世の中の不安要因というならば、村上天皇と登子とのことや、兼通と兼家の兄弟不和の話をなぜ採らないかという疑問も湧く。仏教色というなら、法成寺関連の記事で採られていないものもあり、定子・妍子・道長らの死と葬送など、いくつかの大きい記事が採られていない問題も出てこよう。行事関係も然りである。しかし、そのように言い始めればほとんど全文を採ることになりかねない上に、本文と挿絵とのバランスも悪くなる。したがって、記事は取捨せざるを得ないわけであり、そこまで考えると、多少好みの問題が残るとはいえ、総合的には比較的うまく取捨選択がで

きていると評価してよいのではないかと思うのである。このように、絵入九巻抄出本の編集計画の主要部分が把握できるように思われるのである。

絵入九巻抄出本の本文抄出の特徴の一つとして、松村博司氏も指摘しておられるように、どの巻からも必ず抄出箇所を持ち、小さな巻ではあるが、巻十五・疑と巻二十・御賀は全文採られている。この事実をこれら三項目との関係で眺めてみると、要するに、疑の巻は仏教関係記事として『栄花物語』の中でも主要内容であり、御賀の巻は行事関連として省略部分を作りようがなかったからであって、特にこの二つの巻に抄出に関わる大きなテーマが設定されているわけではない。

初め、明らかに花山院の記事を丹念に追いかけているので、人を追いかけての抄出かと思われたが、花山院以外は追跡されている様子はない。強いて言えば、権力の表舞台から強制的に裏へ回された伊周が比較的良く追われている。しかし、こうして人物中心に捉えなおしても、結局は政変に関わった人々の生き様を追いかけた結果に過ぎないと言えるのである。

こうして三項目をさらに見直してみると、冒頭の村上天皇とその時代に関わる大きい抄出部分は何かという問題が残っていることに気が付く。平安の安定した世の中を象徴するかのような村上天皇とその時代の描写の大きな保存は、まず、『栄花物語』の時代を捉えるための前提としての意味を持つのではないかと思われる。そういう安定した平和な時代であっても、その底辺の部分には常に政変の可能性を孕んでおり、事実、村上天皇時代が終わって程なく安和の変があり、絵入九巻抄出本の編集者は安定の中に巢食う不安定の要因を鋭く見つめているように思われるのである。そういう意味で理解しなければ、村上天皇八宮永平親王を囲んでの嘲笑記事をも理解できないというものである。理想とされる時代が内包している不健康な部分を見据えようとする目が、永平親王暗愚譚を全掲する編集姿勢にはつき

りと窺えるのである。

以上のように捉えてくると、密通など人倫に関する記事も、静かな落ち着いた時代における不安定を作る兆しとして位置づけられていると理解することができる。

なお、絵入九卷抄出版については、雅とされる挿絵についても考証されなければならないが、紙幅の関係もあり、別稿に譲ることにする。

〔注〕

- (1) 『栄花物語の研究』三冊（刀江書院・昭和三十一年、三五年、桜楓社・昭和四二年。前二冊は平成四年、風間書房より復刊）。

巻第一 月の裏

- 一 序
字多天皇・醍醐天皇とその御子
二 太政大臣基経
三 基経の男君
四 朱雀天皇と昌子内親王
五 村上天皇
六 忠平とその諸子
七 実頼・師輔・師尹とその諸子
八 村上天皇の女御達
九 廣平親王御誕生
一〇 安子女御の懐妊
一一 忠平薨去
一二 憲平親王（冷泉天皇）御誕生
一三 憲平親王御誕生の喜び
憲平親王立太子
一四 皇子皇女の誕生
一五 廣幡御息所の機智
一六 宣耀殿女御芳子と兄済時
一七 実頼・師輔・師尹の性質
師輔の信望
一八 安子女御立后
一九 少将教敏の死
二〇 万葉・古今・後撰集撰定の事
二一 小野宮実頼の諸子
師輔女登子
二二 元方父子の霊
二三 昌子内親王東宮参入の事定まる
二四 村上天皇登子をかいみ見給う
二五 源高明女、為平親王に嫁す
重明親王薨す
二六 師輔の薨去
二七 故師輔の法事、頼忠任右大臣
二八 村上天皇と御子達
二九 村上天皇御譲位の思召し
三〇 為平親王東宮に立たれず
三一 村上天皇の女御達の有様
三二 安子中宮御懐妊
三三 村上天皇はじめ人々の憂慮
三四 中宮安子重態に陥る
三五 元方の霊出現
三六 安子中宮崩御、選子内親王御誕生
三七 故中宮安子御葬送
三八 故安子の御法事
三九 村上天皇登子に御消息
四〇 選子内親王五十日の御祝
四一 登子入内
四二 登子尚侍に任ず
四三 按察御息所の姫君、帝の御前に琴を弾く
四四 故安子中宮追慕

- 四八 村上天皇御病悩
四九 村上天皇崩御、東宮踐祚
五〇 故村上天皇御葬送
五一 為平親王と源高明の落胆
五二 守平親王東宮となり、昌子内親王立后
五三 冷泉天皇と御ものけ
官位移動
五四 安和元年正月、司召
五五 女御懷子入内、懐妊により退出
御喪・大嘗会
五六 師貞親王（花山天皇）御誕生
五七 為平親王に対する世評
五八 為平親王子の日の御遊
五九 冷泉天皇御譲位の噂
六〇 源高明陰謀の噂、大宰権帥に左遷
六一 高明女、盛明親王の養女となる
六二 冷泉天皇御譲位、東宮踐祚
六三 師尹薨す
追慕
六四 在衡薨去
六五 実頼薨去
師氏薨去
六六 伊尹摂政となる
源兼明左大臣に任ず
六七 円融天皇御元服、兼通女嬪入内
六八 円融天皇と實子内親王
選子内親王斎院に卜定
六九 兼家女超子、冷泉院妃となる
七〇 宗子・尊子両内親王
七一 村上天皇八の宮永平親王
七二 八の宮の逸話（一）
七三 八の宮の逸話（二の一）
七四 八の宮の逸話（二の二）
- 巻第二 花山たづぬる中納言
一 摂政伊尹の病氣
二 伊尹薨去
後少将義孝
三 義孝の歌
兼通摂政となる
四 女御嬪子立后、昌子皇太后となる
五 兼家、中姫君の内心を心ざす
六 兼通太政大臣となる
前少将・後少将同日に没す
七 兼通・兼家の不和
八 女御超子の懐妊
皇子（居貞）御誕生
九 内裏焼亡、堀河殿里内裏となる
一〇 左大臣兼明を親王に復し、頼忠左大臣となる
一一 兼通病悩、兼家を護す

『栄花物語』絵入版本について

- 一四 兼家女詮子入内
- 一五 中宮嬪子崩御
- 一六 頼忠女遵子入内
- 一七 梅壺女御（詮子）懐妊
- 一八 円融天皇、梅壺女御の懐妊を喜び給う
- 一九 懷仁親王（一条）御誕生
- 二〇 内裏焼亡
 - 円融天皇、若宮を恋い 給う
- 二一 円融天皇の御性質と兼家
- 二二 賀茂・平野行幸、御簾位の思し召し
 - 尊子内親王
- 二三 女御遵子と梅壺女御詮子
- 二四 冷泉院女御超子頓死（一）
- 二五 冷泉院女御超子頓死（二）
 - 兼家の悲嘆
- 二六 女御遵子立后
- 二七 兼家の不平
- 二八 懷仁親王御袴着の準備・兼家、大輔を
 - 寵愛
- 二九 懷仁親王御袴着の準備
 - 御袴着の儀
- 三〇 故女御超子の一週忌
- 三一 円融天皇御簾位の思し召し
- 三二 円融天皇、兼家に御簾位の決意を語り給う
- 三三 花山天皇受禪され、懷仁親王東宮となる
 - 花山天皇の御性質
- 三四 頼忠女詮子入内
- 三五 為平式部卿宮女婉子入内
- 三六 閑院朝光女姫子入内
- 三七 朝光とその後妻
- 三八 女御姫子寵幸を受く
- 三九 女御姫子の寵幸俄かに衰う
- 四〇 濟時女・為光女、天皇に召さる
- 四一 低子入内、時めき給う
- 四二 低子懐妊、退出
- 四三 低子参内、再び里へ退出
- 四四 女御低子卒去
- 四五 故低子の葬送
- 四六 花山天皇出家の思し召し
- 四七 天皇ひそかに宮中を出で給う
- 四八 天皇、花山寺に御出家
- 四九 一条天皇踐祚、居貞親王東宮となる
- 五〇 花山院御出家の有様



- 巻第三 さまざまのよろこび
- 一 兼家摂政となる
 - 二 円融天皇女御詮子立后
 - 三 藤典侍と橘典侍
 - 四 兼家の三女尚侍となる
 - 四女、東宮御匣殿となる

- 八 道長の性質
- 九 冷泉院三の宮・四の宮
- 一〇 御禊・大嘗会の準備
 - 一条天皇御禊の行幸
 - 大嘗会
- 一一 東宮（居貞）御元服、綏子、東宮に参入
 - 公季、権中納言・春宮権大夫となる
- 一二 朝觀行幸
 - 司召
- 一三 石清水行幸
- 一四 道長、源倫子を見染む
- 一五 雅信の子女
- 一六 道長、倫子と結婚
 - 道長、左京大夫となる
- 一七 花山院の熊野御修行
 - 義懷・惟成の修行
- 一八 道隆の姫君
 - 大千代君
- 一九 少将君の出家
- 二〇 鷹司殿倫子懐妊
- 二一 三上皇の御有様
 - 朝觀行幸
- 二二 冷泉院の御有様
- 二三 倫子、彰子を生む
- 二四 道長、高松殿明子と結婚
- 二五 摂政兼家の六十の賀
- 二六 五節
- 二七 賀茂臨時祭、舞人源兼澄の和歌
- 二八 御仏名と追儺
- 二九 朝觀行幸
 - 兼家、二条第修造
- 三〇 師輔の子孫
 - 道長衆望を担う
- 三一 太政大臣頼忠薨去
- 三二 臨時の除目
- 三三 伊周、重光女と婚姻
- 三四 実資、参議となる
- 三五 為尊・敦道両親王の元服
 - 斎宮に恭子女王、斎院に遇子内親王
- 三六 一条天皇御元服、摂政兼家の大饗
- 三七 道隆女定子入内、女御となる
- 三八 道兼と栗田山莊
 - ふくたり君
- 三九 隆家と隆円
- 四〇 兼家の権の北の方
- 四一 兼家病悩、摂政太政大臣を辞す
 - 兼家出家、道隆摂政となる
- 四二 高階一家と、女御定子の立后
- 四三 兼家薨す
- 四四 道隆、有国を憎む



四八 円融院崩御

巻第四 みはてめゆめ

- 一 円融院御葬送
実方の哀傷歌
- 二 花山院熊野御修行
- 三 伊尹の後室と九の御方
- 四 円融院御法事
為光太政大臣に、重信右大臣となる
- 五 東宮、済時女の参入を希望せらる
- 六 済時女妹子東宮へ参入
- 七 麗景殿女御と宣耀殿女御
済時の諸子と実方中将
- 八 道兼・道長らの昇進
伊周の子息松君
- 九 円融院一周忌御法事
- 一〇 道長北の方二人懐妊
- 一一 續善寺御堂供養
- 一二 為光薨去
誠信と斉信
為光の女君達
- 一三 選子内親王の御歌
故為光の法事
- 一四 花山法皇、中務を寵遇
- 一五 弾正宮と九の御方
花山法皇と弾正宮の秀句
花山法皇、中務女を寵遇
- 一六 皇太后宮詮子御悩、御出家
東三条女院
- 一七 東三条女院の長谷詣
- 一八 伊周、大納言に任ず
- 一九 済時左大將に、道兼右大將に任ず
道兼女養着
- 二〇 道隆関白となる、中の君東宮に参入
- 二一 関白三の君、敦道親王と婚す
- 二二 陸家、右大臣重信女と婚す
- 二三 東三条女院、一条殿を領し給う
頼通・頼宗誕生
橘三位腹の道隆の子女
- 二四 東宮女御達の有様
- 二五 伊局内大臣となる
左大臣雅信薨ず
- 二六 道隆、有国父子の官を奪う
- 二七 疫病の流行
道長中の君妍子誕生
- 二八 教明親王誕生
- 二九 道兼、昭平親王女を養女とす
- 三〇 公任、昭平親王女と婚す
道信、道兼室の妹と婚す
- 三一 関白道隆病悩

- 三三 長徳元年、疫病ますます流行
- 三四 伊周、内覧の宜旨を蒙る
- 三五 朝光薨ず
道隆出家、次いで薨去
- 三六 伊周の政治と世評
- 三七 済時薨ず
道長任左大將、道隆・済時の葬送
- 三八 伊周政權の推移を恐る
- 三九 道兼、中川の相如宅に転地
道兼、関白となる
- 四〇 伊周政權の推移を嘆く
- 四一 道兼の病をよそに家臣の祝宴
- 四二 道兼本第へ帰る、病重る
- 四三 重信・保光・道兼薨ず
- 四四 伊周法験を喜ぶ
- 四五 道兼葬送
- 四六 相如病悩
栗田第の服喪
- 四七 相如卒去
- 四八 道長、内覧宜旨を受け、右大臣に任ず
- 四九 道頼薨ず
東三条女院の法華講
道兼の法事、北の方尼となる
定子中宮入内
宣耀殿女御と淑景舍女御
- 五〇 為頼と小大君との贈答歌
- 五一 実資、花山院女御婉子に通ず
- 五二 有国大宰大式となる
- 五三 頼光女元子入内
- 五四 公季女義子入内
- 五五 定子中宮の御述懐
- 五六 伊周、為光女三の君に通ず
- 五七 伊周兄弟、花山院を射る
- 五八 伊周兄弟の不法発覚
- 五九 道隆らの一周忌
- 六〇 捜盜の風評
- 六一 くらべやの女御
定子中宮の御懷妊

巻第五 浦浦の別

- 一 伊周一家の悲嘆
- 二 禁中警固
- 三 内大臣家の召使い暇をとる
- 四 檢非違使の追捕
- 五 伊周・陸家配流の宣命
- 六 伊周密かに木幡に指す
- 七 伊周、父の墓前に述懐
- 八 伊周さらに北野に指す
- 九 内大臣家の検索
- 一〇 伊周帰第

『栄花物語』絵入版本について

- 一四 伊周関戸の院に病む
- 一五 伊周らの配所を改む
- 一六 伊周明石に歌を詠む
- 一七 陸家配所に着く
- 一八 高内侍病む
- 一九 高内侍配所の子らと思う
- 二〇 淑景舎女御と帥の宮の上
- 二一 伊周配所を逃れ、入京
- 二二 伊周捕われ、筑紫へ配流
- 二三 平親信、その子孝義の密告を戒む
- 二四 伊周に対する世評
- 二五 高内侍の病危篤
- 二六 淑景舎女御と中宮の御歌
- 二七 大弐有国、伊周を厚遇
- 二八 高内侍逝去
- 二九 脩子内親王御誕生
- 三〇 陸家の感慨
- 三一 右近内侍、中宮と若宮の事を奏上
- 三二 年改まる（長徳三年）
- 三三 中宮、平惟仲の家に遷御
- 三四 高二位、中宮御所へ参上・
- 三五 中宮・脩子内親王参内
- 三六 脩子内親王、帝・女院と御对面
- 三七 中宮御寵愛厚し
- 三八 中宮御懷妊
- 三九 承香殿女御御懷妊、里第に退出
- 四〇 中宮の御産近づく
- 四一 敦康親王御誕生
- 四二 伊周ら召還の議おこる
- 四三 召還の宣旨下る
- 四四 陸家入京
- 四五 陸家と北の方の贈答歌
- 四六 陸家中宮御所へ参上
- 四七 高二位赤瘡を病む
- 四八 承香殿女御水を生む
- 四九 伊周筑紫を立つ、高二位薨す
- 五〇 伊周入京
- 五一 伊周ら母の墓に詣ず

巻第六 かかやく藤壺

- 一 道長女彰子の装束
- 二 彰子入内
- 三 彰子の容姿
- 四 一条天皇と後宮の有様
- 五 彰子藤壺に入る
- 六 乳母以下に贈物を賜う
- 七 三条太后崩御
- 八 一条天皇と彰子の御仲
- 九 帝・中宮・伊周・女院の御心々
- 一〇 彰子土御門殿に退出

- 一一 彰子立后、定子を皇后と称す
- 一二 皇后定子御懷妊、里第に退出
- 一三 中宮彰子入内
- 一四 五月五日、藤壺の有様
- 一五 一条帝、承香殿女御に文を送り給う
- 一六 皇后、敦康親王の御後見を託し給う
- 一七 相撲の節
- 一八 七夕の贈答歌
- 一九 東宮、相撲御覧

巻第七 とりべ野

- 一 皇后定子御有様、御産の御祈禱
- 二 東宮の女御たち
- 三 五節・臨時祭の頃の宮廷と清少納言
- 四 皇后定子御臨月
- 五 [女美]子内親王御誕生
- 六 皇后定子崩御
- 七 一条帝の悲嘆と東三条女院の思し召し
- 八 帝、中宮方へ渡御されず
- 九 皇后定子の御遺詠
- 一〇 故皇后の御葬送
- 一一 一条天皇の御製
- 一二 東三条女院、[女美]子内親王を迎え給う
- 一三 麗景殿尚侍姦子逝去
- 一四 道長病悩
- 一五 道綱室御産、逝去
- 一六 東三条女院四十の賀その他の準備
- 一七 [女美]子内親王の御有様
- 一八 東三条女院石山詣
- 一九 東三条女院御八講
- 二〇 東三条女院四十の御賀
- 二一 一条帝内裏に遷御
- 二二 東三条女院内裏に入御、一条帝と御物語
- 二三 一条帝、中宮の御方へ渡御
- 二四 東三条女院遷御
- 二五 東三条女院御悩
- 二六 女院の御悩により行幸
- 二七 一条帝還御
- 二八 東三条女院他所へ渡御
- 二九 東三条女院崩御
- 三〇 故女院御葬送
- 三一 故女院の忌中
- 三二 御法事・賀茂祭
- 三三 宣耀殿女御の病悩
- 三四 彈正宮為尊親王薨去
- 三五 淑景舎女御の頓死

巻第八 はつはな

- 一 頼通元服、翌年春日祭の使に立つ
- 二 敦康親王、中宮の御子となる

道長女尚侍妍子東宮参入の噂
 六 道長、則理の前北の方に通ず
 七 道隆女御匣殿の懷妊、同逝去
 八 寛弘二年の司召、賀茂祭
 九 花山院・帥宮賀茂祭御見物
 一〇 伊周准大臣となり、封戸を賜わる
 一一 内裏焼亡
 寛弘三年
 一二 土御門殿の法華三十講と競馬
 一三 花山院の二皇子を冷泉院御子とし給う
 一四 花山院の鑄合
 一五 里内裏のこと
 疫病流行
 一六 寛弘四年、道長の御嶽詣
 一七 寛弘五年、京極殿の年始の有様
 一八 道長四女嬉子の戴餅
 一九 中宮彰子の御有様
 二〇 中宮彰子御懷
 二一 花山院御悩、崩御
 二二 花山院御葬送、兵部の命婦の歌
 花山院皇女の早世
 二三 中宮御懷妊の噂広まる
 一条帝女二の宮 ([女美]子) 御悩
 二四 中宮里第に退出
 二五 [女美]子内親王の御悩一旦平癒
 二六 土御門殿法華三十講
 二七 [女美]子内親王薨去
 二八 中宮の御産近づく
 二九 土御門殿の秋色
 三〇 中宮御産の御祈り
 三一 上達部以下土御門殿に宿直
 三二 中宮御産所に遷る、もののけ出現
 中宮北廂に移御
 三三 中宮御受戒
 皇子 (敦成親王) 御誕生
 三四 御湯殿の儀
 三五 三夜の御産養
 三六 五夜の御産養
 三七 紫式部の和歌
 船遊び
 三八 七夜の御産養
 三九 九夜の御産養
 四〇 行幸を迎える準備
 四一 一条天皇土御門殿へ行幸
 四二 一条帝と若宮 (敦成) 御対面
 四三 道長の感激
 四四 行事の賞
 四五 若宮御髪削ぎと家司始め
 四六 若宮御五十日 (一)
 四七 若宮御五十日 (二)

五〇 中宮内裏へ還御
 道長の贈物
 五一 五節舞姫の参入
 五二 童・下仕御覽
 中宮の女房、実成の五節のかしずきに贈物
 五三 斎院、実成の舞姫の装束御覽
 五四 賀茂の臨時祭
 実成、祭の使教通に贈物
 五五 伊周不遇を嘆く
 五六 一条天皇の御述懷
 五七 中宮再び御懷妊
 五八 頼通左衛門督兼任、中宮里第に退出
 五九 四の御方と道長
 六〇 具平親王女隆姫、頼通と結婚
 六一 露類の儀
 六二 尚侍妍子、東宮参入近づく
 尚侍、東宮参入の事延期
 六三 伊周の周辺教成親王を呪詛
 六四 伊周籠居
 六五 敦良親王御誕生
 六六 伊周病悩
 六七 尚侍妍子、東宮参入
 六八 尚侍の調度品
 六九 尚侍の女房の服裝
 七〇 宣耀殿女御の心遣い
 七一 伊周病重くなり、遺言 (一)
 七二 伊周病重くなり、遺言 (二)
 七三 伊周一家の人々の容姿と、伊周の容貌・才学
 七四 伊周薨去、家族の悲嘆
 七五 帥宮敦道親王と和泉式部
 具平親王薨去
 七六 道長、為光女四の宮を寵愛
 七七 敦成親王賀茂祭御覽
 七八 顯光女延子、敦明親王と結婚
 七九 頼宗、伊周大姫君に通ず
 中宮、伊周中姫君を召し給う
 敦道親王薨去
 八〇 敦成親王御元服
 一条天皇御譲位の思し召し

卷第九 いはかげ

一 一条天皇御悩、御譲位の思し召し
 二 東宮一条院行啓の準備
 三 東宮行啓、帝と御対面
 四 中宮、敦康親王の不遇を嘆く
 五 一条天皇御譲位、敦成親王東宮となる
 六 一条院御出家
 七 一条院治世の有様、崩御
 八 東宮の御有様
 一品宮・帥の宮の御有様

『榮花物語』絵入版本について

- 一一 一条院の御念仏
- 一二 一条院御法事
紫式部の和歌
官々の御動静
- 一三 弁の資業の和歌
- 一四 隆円・鼻円贈答歌
- 一五 三条天皇の後宮とみこたち
- 一六 頼宗の姫君誕生
- 一七 尚侍妍子入内
斎宮當子野の宮に入る
- 一八 中宮彰子の御有様
- 一九 一品宮・帥の宮の御有様
先帝の女房達離散
- 二〇 先帝の女御達服喪、御遺産処分
- 二一 故一条院御剃髪時の和歌
- 二二 左衛門督北の方の長歌(一)
- 二三 左衛門督北の方の長歌(二)
- 二四 左衛門督北の方の長歌(三)
- 二五 左衛門督北の方の長歌(四)
- 二六 左衛門督北の方の長歌(五)
- 二七 内大臣の女御の返歌(一)
- 二八 内大臣の女御の返歌(二)

卷第十 ひかりのかづら

- 一 三条天皇御即位
- 二 冷泉院御臨
- 三 冷泉院崩御
- 四 女房達の歌語
- 五 立後の囁
三条帝と宣耀殿女御の贈答歌
- 六 一条院御念仏
- 七 司召の除目
中宮故院を夢に見給う
- 八 尚侍妍子立后
- 九 中宮妍子女房の有様
- 一〇 中宮の御有様、宮司定まる
- 一一 宣耀殿女御の御心
- 一二 道長、宣耀殿立後の事奏上
- 一三 故大將済時に贈官
- 一四 宣耀殿女御立后
- 一五 三条天皇と皇后の贈答歌
- 一六 大宮彰子の御有様
- 一七 中宮御衣がえ
大嘗会御禊の準備、出車の有様
- 一八 大嘗会悠紀の和歌
- 一九 大嘗会主基の和歌
- 二〇 三条帝故女御達を偲び給う
中宮御懷妊
- 二一 御仏名
長和二年正月

- 二五 皇后内裏に入る
- 二六 左衛門督教通公任女と結婚(一)
- 二七 左衛門督教通公任女と結婚(二)
中宮の御有様

卷第十一 つばみ花

- 一 源頼定承香殿女御と密通
くらべやの女御通任と結婚
- 二 中宮御産の準備
- 三 禎子内親王御誕生
- 四 皇女に御剣を賜う
御湯殿の儀
- 五 御産養の儀
- 六 乳母の任命
- 七 五十日の儀
- 八 三条天皇土御門殿行幸
- 九 禎子内親王帝・中宮と御対面
- 一〇 行幸の夜の管絃奏
- 一一 行幸の賞
- 一二 禎子内親王の御乳母と女房
中宮内裏に入る
- 一三 内裏の新年の有様
- 一四 中宮の御様子
- 一五 禎子内親王の御歯固
- 一六 三条帝と中宮の贈答歌
- 一七 司召、教通北の方懷妊
- 一八 内裏焼亡、造営の事を定む
- 一九 石清水臨時祭、姫宮土御門殿に退出
- 二〇 禎子内親王一条尼上と御対面
- 二一 禎子内親王への贈物

卷第十二 たまのむらざく

- 一 東宮教成親王読書始
- 二 教通室懷妊、女兒誕生
- 三 教通室産後四条の宮に帰る
- 四 隆家目を病む
- 五 隆家大宰大式に任ず
- 六 道長北の方倫子宇治に遊ぶ
- 七 禎子内親王袴着の準備
- 八 僧都隆円卒去
- 九 禎子内親王御袴着
三条天皇御讓位の思召し
- 一〇 隆家大宰府に赴く
- 一一 女二の宮頼通に降嫁の儀
- 一二 頼通北の方隆姫の有様
- 一三 女二の宮降嫁の準備
- 一四 疎通病に罹る
- 一五 貴船明神出現
- 一六 具平親王の薨出現
- 一七 頼通の病平癒

- 二〇 帝新造内裏に遷御、再び焼亡
枇杷殿遷御
- 二一 三条天皇御悩、中宮に御歌を給う
- 二二 三条天皇御譲位、後一条天皇御即位
- 二三 御即位の有様
御代替りと道長
- 二四 堀河院の有様
- 二五 敦康親王具平親王女と結婚
嫡子女王斎宮卜定
頼通の後見
- 二六 道長教明親王を婿取る噂
三条院御悩、三条第造営
- 二七 大宮と中宮の贈答歌
御禊・大嘗会の準備
- 二八 一条尼の病氣
- 二九 一条尼入滅
- 三〇 一条尼の遺言
- 三一 土御門殿・法興院焼亡
土御門殿手斧始
- 三二 一条尼葬送
- 三三 枇杷殿焼亡
- 三四 上皇新造三条第遷御
- 三五 中宮三条第遷御
- 三六 大嘗会御禊
- 三七 大嘗会悠紀・主基和歌
- 三八 前斎宮帰京、道雅密通
- 三九 除目の直物、道長以下の移動
- 四〇 道長摂政を頼通に譲る
道長夫妻准三后
- 四一 四条太皇太后崩御
三条院御悩重し

卷第十三 ゆふしで

- 一 前斎宮の出家
- 二 三条院御落飾
- 三 三条院崩御
- 四 三条院御葬送
- 五 三条院御法事
- 六 三条院の御処分
- 七 中宮一条院に遷御
- 八 師明親王出家を思い煩う
- 九 禎子内親王父院を慕い給う
- 一〇 東宮、退位の決意 (一)
- 一一 東宮、退位の決意 (二)
- 一二 道長大宮と統合
- 一三 敦良親王東宮、前東宮小一条院となる
- 一四 坊官の補任
敦康親王の有様
- 一五 前東宮帯刀の落胆
- 一六 鷹司殿倫子八幡参詣

中宮御所の有様

- 二〇 賀茂行幸
中宮、賀茂行幸御見物
- 二一 道長女御匣殿嬉取の準備
- 二二 御匣殿寛子、小一条院と結婚
- 二三 露顯の儀
- 二四 小一条院の有様
- 二五 堀河第の有様
- 二六 小一条院堀河第訪問 (一)
- 二七 小一条院堀河第訪問 (二)
- 二八 堀河女御の嘆き
- 二九 高松殿の歳暮
一条の宮御荷前御覧
- 三〇 寛仁二年正月
後一条天皇御元服
- 三一 摂政大饗の屏風歌
- 三二 摂政家大饗
頼通敦康親王女を養う
- 三三 堀河女御の憂愁
- 三四 経房、故三条院の御笛を中宮に奉る

卷第十四 あさみどり

- 一 尚侍威子入内
- 二 尚侍威子の容姿
- 三 入内当夜の帝と尚侍
- 四 尚侍と後一条帝の御仲
- 五 道兼の姫君出仕 (一)
- 六 道兼の姫君出仕 (二)
- 七 堀河一家の悲嘆
- 八 道兼女、尚侍の許へ参る
- 九 一条宮の桜
- 一〇 弁の乳母・小侍従の歌
- 一一 道命阿闍梨と中將の乳母の歌
- 一二 長家、行成女と結婚
- 一三 長家の後朝の文
- 一四 長家夫妻の仲
- 一五 長家賀茂祭の使に立つ
- 一六 行成女の事
- 一七 一条宮除服
五月五日の贈答歌
三条院御一周忌
- 一八 京極殿新築移転
- 一九 堀河女御の歌
- 二〇 初雪降る
- 二一 尚侍威子中宮、嫡子尚侍となる
一家より三后並び立つ
- 二二 左大持教通女袴着
- 二三 小一条院女御男子出産
- 二四 寛子所生の御子早世
- 二五 道長の法華八講会

『栄花物語』絵入版本について

- 二八 故敦康親王北の方出家の志
故敦康親王御法事
二九 顕光・頼定不和、堀河院領有争い
故敦康親王北の方の有様
三〇 堀河女御の有様
三一 師明親王の出家

卷第十五 うたがひ

- 一 道長太政大臣の辞表を奉る
二 道長病氣に罹る
三 人々転地を勧む
四 道長出家、御堂建立の本意
五 病氣平癒の祈祷
六 道長の述懐
七 道長出家
八 道長の病氣平癒
九 大宮・中宮土御門殿より還御
一〇 道長、宮宮に御衣を奉る
一一 道長の御堂造営計画
一二 御堂造営工事の有様
一三 道長は弘法大師・聖徳太子の生まれ替り
一四 道長の受戒
一五 道長の法華経信仰
一六 学問の奨励 (一)
一七 四条大納言公任の歌
一八 学問の奨励 (二)
一九 木幡淨妙寺の創建
二〇 木幡淨妙寺三昧堂供養
二一 道長の仏事善業 (一)
二二 道長の仏事善業 (二)
二三 道長の善根無量 (一)
二四 道長の善根無量 (二)
願文

卷第十六 もとのしづく

- 一 堀河女御延子の死
二 源頼定と元子堀河院を去る
三 敦貞親王と顕光の悲嘆
四 小一条院葬送と法事を指示
五 顕光の述懐
六 顕光の状態
七 顕光の老耄
八 倫子故一条尼上を改葬
九 行成大宰権帥に任ず
一〇 寛仁四年、痘瘡流行の噂
道長阿弥陀堂造営
一一 頼定検非違使別当を兼ね、病により辞す
一二 頼定出家、元子も出家す
一三 小野宮実資の姫君
一四 頼定の薨去

- 一七 源経房権帥に、行成大納言に任ず
一八 治安元年、禰子東宮妃となる
一九 東宮と尚侍禰子の御有様 (一)
二〇 東宮と尚侍禰子の御有様 (二)
二一 鷹司殿倫子出家
二二 経房、大宰府に赴任
二三 長家北の方病悩、卒去
二四 長家北の方葬送
二五 忌中の和歌
故姫君の法事
二六 左大臣顕光薨去
三昧僧都入寂
二七 臨時の司召
二八 皇太后宮妍子の女房達『法華經』書写 (一)
二九 皇太后宮妍子の女房達『法華經』書写 (二)
三〇 経卷の有様
三一 女房達の有様
三二 阿弥陀堂に経供養を行う
三三 春日行幸
三四 別当・社司を賞す
三五 長家、齊信女と結婚
三六 齊信の大炊御門第焼亡
三七 法成寺西北院供養
三八 西北院不断念仏 (一)
三九 西北院不断念仏 (二)
四〇 西北院不断念仏 (三)
四一 治安二年、枇杷殿造営
大宮・皇太后宮の贈答歌
四二 公任夫妻天王寺詣、道中にて姫君逝去
四三 公任夫妻の哀傷歌
四四 皇太后宮枇杷殿に還御
四五 公任室尼上、小二条殿に移る
法成寺法華三十講
四六 法成寺御堂供養の準備
四七 公任妹と北の方の歌
四八 宮の女房法成寺御堂供養の準備

卷第十七 おむがく

- 一 翁と老法師の和歌
二 法成寺御堂供養の準備
三 御堂供養の試案
四 試案に三后行啓
五 女房達の服装
六 後一条天皇の行幸 (一)
七 後一条天皇の行幸 (二)
八 東宮行啓
九 宮宮に饗饌を奉る
一〇 御堂庭前の有様
一一 金堂扉の絵
一二 金堂の諸仏

- 一六 舞楽
- 一七 金堂供養
- 一八 金堂供養後の祿 (一)
- 一九 金堂供養後の祿 (二)
- 二〇 法成寺の夜の有様
- 二一 一品宮の御様子
- 二二 三后諸堂見物
- 二三 阿弥陀堂孟蘭盆講
- 二四 御堂の後宴
- 二五 三后還御

卷第十八 たまのうてな

- 一 尼達の御堂参詣、阿弥陀堂と屏絵
- 二 交野の尼の歌
念誦と修行の部屋
- 三 阿弥陀如来の相好 (一)
- 四 阿弥陀如来の相好 (二)
- 五 御堂の北廂、庭の有様
黄昏の御念仏 (一)
- 六 黄昏の御念仏 (二)
- 七 御堂の夜景
- 八 尼達の会話
- 九 尼達和歌
- 一〇 若き人と尼達和歌
- 一一 三昧堂参詣
- 一二 阿弥陀堂懺法
- 一三 花の尼
- 一四 尼、里人を案内して諸堂を廻る (一)
- 一五 尼、里人を案内して諸堂を廻る (二)
- 一六 尼、里人を案内して諸堂を廻る (三)
- 一七 尼、里人を案内して諸堂を廻る (四)
- 一八 尼、里人を案内して諸堂を廻る (五)
- 倫子御賀と禎子内親王御装着的準備
- 一九 朝観行幸と司召
大納言齐信の棧敷殿焼亡
- 二〇 大納言公任初瀬詣

卷第十九 御装ぎ

- 一 禎子内親王御装着 (一)
- 二 禎子内親王御装着 (二)
- 三 皇太后と一品宮土御門殿に行啓
女房達の服装
- 四 大宮西の対へ渡御
- 五 西の対のしつらひ
- 六 御装着的次第
- 七 大宮彰子へ贈物
- 八 御髪上の典侍へ贈物
- 九 乳母らの加階
又の日の女房の服装
一品宮へ贈物

- 一三 大宮、田植御覧 (一)
- 一四 大宮、田植御覧 (二)
- 一五 道長の逆修法事
- 一六 円教寺・法興院御八講
- 一七 道長、宇治御八講 (一)
- 一八 道長、宇治御八講 (二)
- 一九 土御門殿歌会 (一)
- 二〇 土御門殿歌会 (二)
- 二一 内大臣教通、大井川御祓

卷第二十 御賀

- 一 土御門殿の有様
皇太后宮嬬子、土御門殿行啓
- 二 中宮殿子行啓
女房達の服装
- 三 土御門殿の庭
- 四 六十賀の盛儀 (一)
- 五 六十賀の盛儀 (二)
- 六 御賀の和歌
- 七 道長七次寺廻り
- 八 大宰権帥源経房任地に没す

卷第二十一 後くみの大将

- 一 教通室懷妊、三条殿に帰る
- 二 教通室男子平産
- 三 三条殿正月の有様、教通重病悩
- 四 もののけの出現
- 五 教通北の方逝去
- 六 物言わぬもののけ
- 七 教通北の方霊の事 (一)
- 八 教通北の方霊の事 (二)
- 九 教通北の方の葬送
- 一〇 忌中の有様
- 一一 北の方の夢中の歌
四十九日の法事
- 一二 教通の好色な性癖
- 一三 公任夫妻の哀傷
教通の悲傷
- 一四 法成寺僧房焼亡
- 一五 道長女隆子、源師房と結婚
- 一六 脩子内親王御落飾 (一)
- 一七 脩子内親王御落飾 (二)
脩子内親王御受戒

卷第二十二 とりのまひ

- 一 法成寺薬師堂遷仏の盛儀 (一)
- 二 法成寺薬師堂遷仏の盛儀 (二)
- 三 法成寺薬師堂遷仏の盛儀 (三)
- 四 法成寺薬師堂遷仏の盛儀 (四)
- 五 祇陀林寺舍利会 (一)

『栄花物語』絵入版本について

八 薬師堂供養と堂内の諸仏 (一)

九 薬師堂供養と堂内の諸仏 (二)

卷第二十三 こまくらべの行事

一 高陽院の美観

二 太皇太后宮高陽院へ行啓

三 高陽院の駒競、行幸啓 (一)

四 高陽院の駒競、行幸啓 (二)

五 駒競の後宴、為政の和歌序 (一)

六 駒競の後宴、為政の和歌序 (二)

七 後宴の和歌 (一)

八 後宴の和歌 (二)

九 大宮御逗留

一〇 中宮多宝塔供養 (一)

一一 中宮多宝塔供養 (二)

一二 中宮多宝塔供養 (三)

一三 中宮多宝塔供養 (四)

一四 中宮入内せず

五節

一五 道長長谷寺参籠

一六 教通室一周忌法会

卷第二十四 わかばえ

一 万寿二年正月

二 頼通の妾対の君

三 対の君男子出産

四 枇杷殿大饗、女房達の準備 (一)

五 枇杷殿大饗、女房達の準備 (二)

六 女房達・上達部の参入着座

七 関白・小野宮右大臣参入、女房の出衣

八 関白以下の座

九 女房の服装

一〇 内大臣教通参入

一一 薫香と舞楽

一二 小野宮、女房の衣装を評す

一三 弁の乳母の姪養着

一四 大饗御遊

一五 頼通女房の華美を皇太后に啓す

一六 道長、頼通を勘当す

一七 四条宮焼亡

一八 通房、道長第に移る

一九 敦平親王、兼隆女と結婚

二〇 皇后城子御病悩

二一 太皇太后宮御八講

皇后宮御もののけに悩み給う

二二 尚侍孀子御懷妊

卷第二十五 みねの月

一 皇后城子御悩

二 皇后城子崩御

六 葬送 (三)

七 相任と中納言の君贈答歌

八 四十九日の御法事

九 関寺の牛仏 (一)

一〇 関寺の牛仏 (二)

一一 院の女御 (寛子) 御悩

尚侍 (孀子) 御産の御祈り

一二 東宮土御門殿に行啓 (一)

一三 東宮土御門殿に行啓 (二)

一四 赤もがさの流行

院の女御 (寛子) 御悩危篤 (一)

一五 院の女御 (寛子) 御悩危篤 (二)

一六 院の女御 (寛子) 卒去

一七 葬送 (一)

一八 葬送 (二)

一九 葬送 (三)

二〇 高松殿明子の悲嘆

小一条院の悲嘆

二一 道長の厚意

二二 小一条院二の宮出家

二三 小一条院御歌

故女御の法事

二四 尚侍 (孀子) 赤もがさにかかる

二五 長家室赤もがさを病む

二六 尚侍 (孀子) 御産氣

二七 尚侍 (孀子) 御悩 (一)

二八 尚侍 (孀子) 御悩 (二)

卷第二十六 楚王のゆめ

一 親仁親王 (後冷泉) 御誕生

二 御湯殿の儀

三 頼通産養の準備

四 八月四日の御湯殿の儀

五 尚侍 (孀子) 御悩

六 尚侍 (孀子) 薨去

七 道長・倫子らの悲嘆

八 御遺骸の有様

九 葬送の事を定む

一〇 若宮の御乳母

一一 故尚侍入棺

一二 入棺、法興院に殯す

一三 法興院における有様

一四 小一条院女御と冷泉院女御の例

一五 大宮・東宮の悲しみ

一六 尚侍の女房、若宮の御方に奉仕

一七 道長無常を観じ山住みを思う

一八 道長と小式部贈答歌

一九 尚侍葬送 (一)

二〇 尚侍葬送 (二)

二一 尚侍葬送 (三)

- 二五 院源僧都道長の悲嘆をいさむ
二六 若宮の御乳母
道長故小左衛門の遺族を弔う
二七 小一条院殿ばらと世語り (一)
二八 小一条院殿ばらと世語り (二)
二九 小一条院殿ばらと世語り (三)
三〇 道長と殿ばらの物語
三一 道長の消息に斉信の返事
三二 小一条院女御の法事
大納言斉信の居所

卷第二十七 こゝものたま

- 一 万寿二年秋のあわれ
二 長家北の方逝去 (一)
三 長家北の方逝去 (二)
四 長家北の方逝去 (三)
五 長家北の方逝去 (四)
六 斉信夫妻の悲嘆
七 故長家北の方の葬送の事を定む
八 長家の悲嘆
九 法住寺に殯す
一〇 忌中の有様 (一)
一一 忌中の有様 (二)
法事の準備
一二 故尚侍 (嬬子) の法事
一三 若宮 (後冷泉) 御五十日
一四 故長家北の方の葬送
一五 法事の準備
一六 左兵衛督公信北の方の病氣
一七 故長家北の方の法事
五節の仕度
五節
一八 小式部内侍、産後に逝去
一九 右頭中将頼基北の方逝去
二〇 四条大納言公任出家を発意
四条大納言と女御の贈答歌
公任出家の準備
二一 公任、二条殿に人々と対面 (一)
二二 公任、二条殿に人々と対面 (二)
二四 公任、女御禊子に對面
二五 公任、長谷に籠居
二六 定頼長谷に父公任と対面
二七 公任薨髪
道長・公任の贈答歌
二八 内大臣教通、公任を訪る
二九 公任と女御・定頼らの贈答歌
三〇 斉信、公任を長谷に訪る (一)
三一 斉信、公任を長谷に訪る (二)
三二 公任と御匣殿生子の贈答歌
三三 大宮彰子御出家の準備 (一)

- 三七 皇太后宮妍子の御歌
三八 斎院遷子内親王・道長贈答歌
枇杷殿妍子に対する女院の御返歌
三九 法成寺戒壇造営の準備
公信北の方逝去
四〇 教通、禊子内親王と結婚
禊子内親王小二条殿に移御
四一 皇太后宮妍子、御八講準備
四二 左兵衛督公信薨去
四三 枇杷殿御八講 (一)
四四 枇杷殿御八講 (二)
四五 故公信の葬送・法事
四六 公信女の事など
中納言長家なお斉信第にあり
四七 後一条天皇の御悩
中宮御懷妊
四八 故院の女御・尚侍一周忌法事
女院・東宮、若宮を愛し給う
御匣殿生子、裳着・入内の噂
四九 故長家北の方一周忌法事
中宮威子、左衛門督第に退出

卷第二十八 わかみづ

- 一 中宮威子出産近づく
二 御産の御祈
三 皇女 (章子内親王) 御誕生
四 産養と乳母
五 枇杷殿の宮臨時客 (一)
六 枇杷殿の宮臨時客 (二)
七 朝觀行幸啓と京極・大炊御門辺の火事
八 章子内親王五十日の祝
章子内親王の御有様
九 禊子内親王、東宮御参りの風説
一〇 禊子内親王東宮御参りの事定まる
一一 皇太后宮妍子御悩 (一)
一二 皇太后宮妍子御悩 (二)
一三 東宮の御使枇杷殿に参上
一四 頼通御参りの事を沙汰
一五 弘徽殿の飾り付け
一六 禊子内親王東宮御参り
一七 東宮の後朝の御使
一八 禊子内親王の御悩
一九 東宮の若宮侍着の準備
東宮、禊子内親王の御方へ渡御

卷第二十九 たまのかざり

- 一 一品宮禊子内親王の御方の有様
二 皇太后宮妍子御悩の御祈禱 (一)
三 皇太后宮妍子御悩の御祈禱 (二)
四 道長、十奇仏供養

『栄花物語』絵入版本について

- 八 一品宮枇杷殿に退出
- 九 道長病をおして枇杷殿に参る
源俊賢出家
- 一〇 道長百体釈迦如来を法成寺に移す (一)
- 一一 道長百体釈迦如来を法成寺に移す (二)
- 一二 道長再び枇杷殿に参る
- 一三 信長枇杷殿より二条殿に退出
- 一四 皇太后宮薨子、御悩六カ月を越ゆ
- 一五 皇太后宮妍子御堂に籠り給う
- 一六 道長百体釈迦如来供養の準備
上東門院御堂に渡御
- 一七 御堂百体釈迦如来供養
- 一八 『維摩経』を供養し、皇太后宮の御悩を祈る
- 一九 皇太后宮妍子今南殿に移御
- 二〇 皇太后宮妍子御湯殿参り、落飾
- 二一 皇太后宮妍子崩御 (一)
- 二二 皇太后宮妍子崩御 (二)
- 二三 皇太后宮御葬送の日を陰陽師に問う
- 二四 皇太后宮御遺骸入棺
- 二五 皇太后宮御葬送 (一)
- 二六 皇太后宮御葬送 (二)
御遺骨を木幡に葬る
- 二七 皇太后宮御願により、五大尊を造り奉る
- 二八 一品宮以下御服を奉る
- 二九 五大尊・百体不動尊供養
- 三〇 典侍その他の和歌
- 三一 七日の御法事
- 三二 道長の病益々重し
- 三三 故皇太后宮御法事を御堂に行う (一)
- 三四 故皇太后宮御法事を御堂に行う (二)

卷第三十 つるのはやし

- 一 道長病悩
故皇太后宮御正日の法事
- 二 道長の病おもる
- 三 五節
- 四 一品宮道長の病を訪い、枇杷殿渡御
- 五 源師房室隆子、道長の病を訪う
- 六 中宮威子法成寺に行啓
- 七 道長・女院贈答歌
- 八 道長、阿弥陀堂に移る
- 九 後一条天皇法成寺に行幸 (一)
- 一〇 後一条天皇法成寺に行幸 (二)
- 一一 東宮行啓
- 一二 御堂に見舞い集まる
- 一三 道長臨終のさま (一)
- 一四 道長臨終のさま (二)
- 一五 道長臨終のさま (三)
- 一六 道長薨去
- 一七 葬送 (一)

- 二一 遺骨を木幡に葬る
- 二二 大納言行成薨去 (一)
- 二三 大納言行成薨去 (二)
- 二四 中宮、道長往生を夢に見給う
- 二五 融碩の夢
- 二六 道長の遺産処分
- 二七 倫子の悲嘆
- 二八 上東門院、仏・経供養
- 二九 万寿五年、道長の法事準備
源師房北の方の御産
- 三〇 道長の四十九日法事
- 三一 道長回想
行成の四十九日法事
- 三二 除目
長家、倫子第に住む
- 三三 百体観音を阿弥陀堂に安置

卷第三十一 殿上の花見

- 一 道長薨去後の一家の有様
- 二 上東門院の御有様
- 三 中宮威子の御有様
高松殿明子腹の君達
- 四 章子内親王袴着
- 五 章子内親王袴着後宴の和歌
- 六 章子内親王一品になる
- 七 御匣殿生子入内の問題
- 八 頼宗の大姫君と中姫君
- 九 式部卿宮姫君と御匣殿の有様
- 一〇 中宮威子の御有様
- 一一 後一条院姫宮達の御有様
- 一二 遷子内親王斎院退下
- 一三 行成薨去の頃公任の和歌
- 一四 右兵衛督実成の子女
- 一五 能信、公成女茂子を養女とす
長家、女院の中將に通ず
- 一六 源祇子、関白頼通の子を生む
- 一七 前斎院、兵部卿宮と御対面
- 一八 殿上の人人白河の花見
- 一九 上東門院石清水・住吉御幸 (一)
- 二〇 上東門院石清水・住吉御幸 (二)
- 二一 上東門院石清水・住吉御幸 (三)
- 二二 石清水御参詣
- 二三 淀川の船旅
- 二四 住吉御参詣
- 二五 天王寺御参詣
- 二六 天王寺より還御
- 二七 天の河にて和歌を召さる (一)
- 二八 天の河にて和歌を召さる (二)
- 二九 天の河にて和歌を召さる (三)
帰京

- さらに大膳職に遷御
 三二 中宮初斎院に行啓
 三三 章子内親王の御有様
 三四 斎院御禊
 賀茂祭
 三五 上東門院内裏に入御 (一)
 三六 上東門院内裏に入御 (二)
 斎院に行啓
 三七 斎院庚申和歌
 斎院の連歌
- 卷第三十二 歌合
 一 鷹司殿倫子七十の賀 (一)
 二 鷹司殿倫子七十の賀 (二)
 三 鷹司殿倫子七十の賀 (三)
 御仏名
 四 御賀屏風歌
 五 上東門院に朝観行幸啓
 六 内裏
 七 殿上賭弓
 八 倫子と中宮の贈答歌
 九 藤壺の花の宴
 一〇 賀茂祭
 一一 小一条院の御子たち
 一二 小一条院へ換非違使向かう
 内大臣教通、御匣殿の入内を図る
 一三 女院、高陽院に殿の上に対面
 一四 殿上人、嵯峨野の花見
 新嘗会
 一五 一品宮三人おわします
 一六 民部卿寄信覺ず
 一七 関白頼通、師房・信家を養子とす
 一八 東北院の建立と念仏会
 一九 高陽院水閣歌合 (一)
 二〇 高陽院水閣歌合 (二)
 二一 高陽院水閣歌合 (三)
 二二 高陽院水閣歌合 (四)
 二三 高陽院水閣歌合 (五)
 二四 高陽院水閣歌合 (六)
 二五 高陽院水閣歌合 (七)
 二六 高陽院水閣歌合 (八)
 二七 通房元服
 春宮大夫頼宗の君達
 二八 通房、春日祭の使
 二九 章子内親王、御裳着の仕度
 三〇 後一条天皇、御譲位のおぼしめし
 三一 後一条天皇御悩

- 卷第三十三 きるはわびしとなげく女房
 一 後一条天皇崩御

- 御葬送
 出羽弁の歌
 五 上東門院京極殿に遷御
 六 中宮威子の悲嘆
 七 清涼殿の壺の柳の造花芽をふく
 八 中納言頼基出家
 九 故後一条院葬送の夜和歌
 一〇 馨子内親王斎院退下
 美作三位の出家
 一一 女房達の忌中の和歌
 一二 上東門院、一品宮・前斎院に御対面 (一)
 一三 上東門院、一品宮・前斎院に御対面 (二)
 一四 中宮威子御出家、ついで崩御 (一)
 一五 中宮威子御出家、ついで崩御 (二)
 一六 中宮亡き後の鷹司第の悲しみ
 一七 宮々上東門院に遷り給う、女房達の追慕の歌
 一八 女房達の中宮追慕の歌
 一九 御禊・大嘗会 (一)
 二〇 御禊・大嘗会 (二)
 二一 女房達と長家の贈答歌

- 卷第三十四 暮まつほし
 一 敦康親王女嬬子入内
 二 禊子内親王皇后に、嬬子女王中宮に立ち給う
 三 上東門院御剃髪
 四 後一条院御一周忌
 後朱雀帝と皇后宮の贈答歌
 五 後朱雀帝宮達を愛し給う
 六 親仁親王御元服、立太子
 七 高陽院に行幸
 中宮の前裁合と菊合
 八 皇后宮大夫能信病悩
 九 章子・馨子両内親王髪削ぎ
 一〇 三位中将信家、僊子女王と結婚
 一一 章子内親王裳着
 一二 章子内親王東宮妃となる (一)
 一三 章子内親王東宮妃となる (二)
 一四 弁の乳母・出羽弁の歌
 一五 中宮嬬子御懷妊
 後朱雀天皇の御性質
 一六 清涼殿の長橋荒廃、女房達の歌
 一七 上東門院宮廷に入る
 一八 清涼殿を改築のため壊す
 一九 中宮皇女 (祐子) 出産
 二〇 上東門院故後一条院を偲び給う
 二一 大夫の君道家卒去
 二二 中宮再び御懷妊、伊勢大神宮の託宣
 二三 内裏焼亡により京極殿へ行幸
 二四 中宮、皇女祿子出産、ついで崩御
 二五 御匣殿生子入内

『栄花物語』絵入版本について

- 二八 後朱雀天皇故中宮を偲び給う
 二九 通房員外権大納言に任ず
 新造内裏に遷御
 尊仁親王読書始の儀
 三〇 頼宗女延子入内
 三一 宮廷の有様
 三二 内裏焼亡
 三三 入道大納言公任と天皇の贈答歌
 三四 殿上の雪山の歌
 天皇一条院に遷御
 三五 管絃の遊び
 三六 権大納言通房右大将兼任
 一条院焼亡、高陽院の有様
 三七 正月、後宮の有様
 三八 最勝御八講
 出羽弁の事
 三九 後一条天皇と後朱雀天皇の比較
 四〇 高陽院駒鞍行幸

卷第三十五 くものふるまひ

- 一 関白頼通病悩、通房薨去
 二 通房北の方の悲嘆と和歌
 三 法事の和歌
 四 通房手習の歌
 五 通房北の方と延子女御の贈答歌
 六 頼通の悲嘆
 七 東北院御念仏
 八 麗景殿女御懷妊、頼宗任大將
 後朱雀天皇にきみを病み給う

卷第三十六 根あはせ

- 一 後朱雀天皇の御悩おもる
 二 教通、女御生子立後の事を嘆く
 三 女御生子退出せんとす
 四 斎宮良子准三宮の宣旨
 女御生子立後の事をめぐり、後朱雀天皇夢を見給う
 五 後朱雀天皇御譲位
 六 斎宮と二の宮の後事につき、後朱雀天皇の憂慮
 七 後朱雀天皇崩御
 八 梅壺女御の悲嘆と千部経読経書写
 麗景殿女御皇女御産
 九 後冷泉天皇御即位、京極殿へ遷御
 一〇 四条中納言定頼薨去
 一一 弁の乳母・源三位の贈答歌
 一二 出羽弁以下の歌
 一三 倚廬の御所の有様
 皇后宮の御有様
 一四 梅壺女御生子の御有様
 一五 上東門院白河殿に遷御
 一六 白河殿の御生活 (一)

- 二〇 教通中姫君と小姫君
 二一 太政官朝所焼亡、天皇二条殿に遷幸
 二二 章子内親王流行病をやむ、立后宣旨
 二三 章子内親王立后 (一)
 二四 章子内親王立后 (二)
 二五 小野宮実資薨去
 二六 章子内親王内裏に入御
 二七 御禊・大嘗会
 二八 白河殿の天狗
 二九 右大臣教通女歡子入内
 三〇 永承四年内裏歌合 (一)
 三一 永承四年内裏歌合 (二)
 禊合
 三二 法成寺内の新堂供養 (一)
 三三 法成寺内の新堂供養 (二)
 三四 内大臣頼宗三女入内の心ざし
 三五 関白頼通女寛子入内
 三六 女御寛子皇后に冊立
 三七 皇后寛子の周辺
 三八 教通、生子立后なきを嘆く
 能信養女茂子入東宮
 三九 女御歡子懷妊、出産
 四〇 女御歡子准三宮
 四一 永承六年内裏根合 (一)
 四二 永承六年内裏根合 (二)
 四三 頼通男師実元服
 三条殿祇子逝去
 四四 後冷泉天皇癰病を悩み給う
 四五 鷹司殿輪子薨去
 四六 高陽院焼亡、冷泉院に遷御
 四七 里内裏京極殿焼亡
 皇后寛子御悩
 四八 師実、石清水臨時祭舞人を勧む
 四九 後冷泉天皇の御性質
 五〇 一条院里内裏焼亡
 師実、少少將に通じ子を挙ぐ
 五一 教通、嬪子女王と結婚
 斎院東宮妃となる
 五二 東宮の御こたち
 中宮・皇后の御有様
 五三 女御歡子の御有様
 五四 梅壺女御生子尼となる
 五五 五節の装束
 五六 中宮・皇后・女御の御有様
 五七 大納言信家の忍び歩き
 五八 師実、源麗子と結婚
 五九 頼通以下昇進
 五節、内大臣師実の有様
 六〇 東宮の御事
 六一 内大臣師実大嘗

- 正月の拝礼
 六四 皇后宮春秋歌合 (一)
 六五 皇后宮春秋歌合 (二)
 六六 皇后宮春秋歌合 (三)
 六七 皇后宮春秋歌合 (四)
 六八 皇后宮春秋歌合 (五)
 六九 この物語を書いた作者のことば

卷第三十七 けぶりの後

- 一 中宮章子の七夕祭
 二 六条斎院と物語合
 三 内裏・大極殿焼亡
 法成寺焼亡
 四 斎院の交替
 五 梅壺女御の病氣と父教通の焦慮
 六 中納言俊房前斎院に密通
 七 東宮女御馨子御産のみこ夭亡
 東宮女御茂子薨去
 八 中宮の女房馬場殿に花を見る
 九 天皇蹴鞠御覧
 中宮・皇后交替に参内
 一〇 女御歎子小野に滞在
 一一 東宮女御馨子男みこ御産
 一二 師実北の方君御産
 東宮若宮の御乳母達
 一三 東宮若宮御湯殿の儀
 一四 若宮夭亡・京極殿の産養
 一五 民部卿長家飲水病をやむ
 一六 長家薨去
 頼宗右大將を辞し、師房代わる
 一七 教通左大將を辞し、師実代わる
 頼宗薨去
 一八 頼通宇治の別第を寺とし、これに籠もる ㊦
 一九 高陽院宸筆御八講
 二〇 五巻の日 (一)
 二一 五巻の日 (二)
 二二 年改まる (治暦三年)
 二三 高陽院里内裏の有様
 二四 中宮二条殿に造仏供養
 二五 宇治行幸
 東宮と関白御仲悪しき事

卷第三十八 松のしづえ

- 一 源基子後三条天皇の寵を得て懷妊
 二 基子尾張前司経平の家に退出
 三 一品宮の御配慮
 四 皇子実仁親王御誕生
 五 基子女御となりて入内
 六 女御基子と後冷泉院後宮との比較
 七 後三条院と後冷泉院の御世の相違 (一)

- 一一 東宮大夫の女御道子の有様
 一二 二の宮実仁親王御五十日
 一三 新造内裏に遷幸
 一四 祇園・日吉社行幸、地震
 一五 実仁親王の御乳母
 季宗左中將に任ず
 一六 斎宮俊子内親王伊勢に下り給う
 一七 梅壺女御基子流産
 篤子内親王斎院に卜定
 一八 後三条天皇御讓位
 一九 女御基子准三宮
 後三条院飲水病をやみ給う
 梅壺女御皇子御産
 二〇 後三条院方違の御幸
 二一 天王寺御幸 (一)
 二二 天王寺御幸 (二)
 二三 天王寺御幸 (三)
 二四 天王寺御幸 (四)
 二五 天王寺御幸の和歌 (一)
 二六 天王寺御幸の和歌 (二)
 二七 天王寺御幸の和歌 (三)
 二八 天王寺御幸の和歌 (四)
 二九 天王寺御幸の和歌 (五)
 三〇 天王寺御幸より遷御
 三一 後三条院の御悩重り、御出家
 三二 後三条院崩御
 三三 哀傷歌の贈答

卷第三十九 布引の滝

- 一 頼通薨去
 二 頼通回顧
 三 故頼通七七法事
 四 淳子内親王斎宮に卜定
 斉子内親王斎院に卜定
 五 女御賢子懷妊、立後の宜旨
 太皇太后章子内親王女院となる
 六 中宮大襲
 七 権大納言頼房
 八 東三条殿の中宮御産の有様
 九 頼房女寵幸を得て皇子を生む
 一〇 上東門院御悩
 一一 大嘗祭御禊
 一二 上東門院崩御
 一三 上東門院御葬送
 一四 中宮賢子皇子を生み奉る
 一五 若宮の御七夜
 一六 中宮東三条殿へ渡御、白河天皇行幸
 一七 若宮の御乳母
 中宮賢子再び御懷妊
 一八 関白教通薨去



『栄花物語』絵入版本について

- 二二 中宮賢子皇女御産
- 二三 関白師実布引の滝遊覧
- 二四 中宮宮達の御戴餅
臨時客
- 二五 中将師通の婚儀
- 二六 右大臣師房風病をやむ
朝観行幸
- 二七 師房薨去
- 二八 師房北の方隆子の幸福
- 二九 師通宰相大將となる
毎年賀茂祭行幸の始
- 三〇 関白師実賀茂詣で
- 三一 女御道子准三宮となり入内
- 三二 赤もがさ流行
- 三三 女御道子皇女御産
中宮入内、一の宮に対する思い出
- 三四 媼子内親王斎宮に卜定の予定
- 三五 法勝寺供養
- 三六 一の宮追憶
宇治法華八講
- 三七 承暦二年内裏歌合
勅撰和歌集の御沙汰
- 三八 媼子内親王持着、斎宮に卜定
中宮皇女御産
- 三九 関白師実夫妻石清水参詣
五節
- 四〇 斎宮御禊
- 四一 中宮皇子御産
師実、孫忠実を養育
- 四二 中宮御懷妊、皇女御産
- 四三 師通北の方と離別
- 四四 信長任太政大臣、俊家以下遷任
- 四五 女御道子と中宮賢子
俊家・能長薨去
- 四六 大臣召し
- 四七 善仁親王賀茂祭御覧



- 一二 白河院高野御幸
忠実石清水臨時祭の舞人を勤む
- 一三 石清水八幡宮行幸
- 一四 白河院・前斎宮賀茂祭を御見物
- 一五 二条院御堂を建て供養
- 一六 民部卿経信と女房の贈答歌
- 一七 皇太后小野に籠居、四条宮宇治に御堂建立
瑠璃女御逝去、令子内親王斎院に卜定
- 一八 令子・禰子両内親王白河院に御対面
斎院御禊
- 一九 斎宮善子内親王伊勢下向
忠実俊房女と結婚
- 二〇 忠実春日祭上御勤仕



巻第四十 紫野

- 一 四条宮・関白師実夫妻天王寺詣で
- 二 中宮賢子崩御
- 三 白河天皇の御悲嘆
- 四 白河天皇故中宮のため御堂造営
右大弁通俊らの歌
- 五 もがさ流行、東宮薨去
- 六 白河天皇鳥羽離宮造営、御譲位
- 七 師房北の方逝去
- 八 堀河天皇御即位
御譲位後の白河上皇
- 九 新斎宮卜定、前斎宮帰京
- 一〇 御禊